

『H. C. アンデルセン』についての一考察

A Study of 『H.C.Andersen』

矢野 日出子

はじめに

私の一生は美しい童話です。たいそう豊かで幸せな童話です。
貧しい少年の私が、一人ぼっちで広い世間に出た時、人の運命を動かす女の魔法使いが私に向かって「自分の進む道と目当てを自分で選びなさい。～中略～私がお前を守って導いてあげるよ。」と言ったとしても私の運命を、私のこれまでの一生を、もっと幸せに、もっと上手に、もっと利口に導くことはできなかったでしょう。

私の身の上話をお聞きになれば“情け深い神様がおいでになって、何事にもよくなるように導いてくださるものだ。”ということが分かるでしょう。私も世間からそういう風に聞かされています。

以上はアンデルセンが自伝の中で、「魔女が万能の魔法を使ってすら私の人生を切り開くことはできない、しかし神様なら恵みを与えてくださる。」と語っている言葉であり、彼の信仰心の深さや貧しかった生い立ちを物語っている。また、自分の一生に満足していたことが分かる。尤も彼は、自分を語ることが好きで自叙伝を五度も書いたとされている。いわば生まれつき作家の素質をもっていたと言えるだろう。

私自身も子どもの頃にはアンデルセン童話を聞いていた。60年前の日本といえば敗戦で混乱した世の中であり、幼児向けの物語など皆無に等しい。それでも私の記憶にお話はありやはり幼稚園や家庭では話をしてくれていたのであろう。当時の幼児向けの話といえば日本古来の昔話か西欧からのアンデルセンやグリム兄弟の話が主流であった。

しかし自分が幼稚園の教師となつてからは、毎年2月末には「生活発表会」をもち幼児の遊びを中心とし、例えば彼の有名な童話である「親指姫」「野の白鳥」等々を幼児に読み聞かせ、台本も何もないところから“自分のクラスオリジナルの劇”をつくっていた。それは、彼の話聞いて幼児が「いいなー!」「かわいそうだなー」など、共感し共鳴するところから始まり、

幼児の自発的な遊びを中心とし、およそ20分間の劇にまとめる保育である。幼児は友だちや先生と一緒に

- ・ 科白を考える
- ・ その場面に相応しい歌やダンスを創作する
- ・ 小道具や大道具を作る
- ・ 背景を製作する

等々、自分の考えを出し合っているいは、友だちと力を合わせて懸命に劇あそびに取り組む。その姿からは年間の幼児の育ちを感じ、目を見張るものがある。そして、教師にとっては、取り組む姿から幼児一人一人の性格を把握する場ともなる。また、この劇あそびにまとめていく遊びの過程で、幼児は友だちと力を合わせて一つの劇を創る喜びを感じ、友だち関係も豊かになってくる。幼児期の特性として“自分の興味のあるものであれば驚く程の力を出す”反対に“面白くなければ、楽しくなければ喜びを感じられない”ということが言え、幼児教育には何より“自発性”が求められる。「親指姫」「野の白鳥」「みにくいアヒルの子」などは幼児が大好きな話であり、しばしばこうして劇遊びに取り上げられ幼児の生活を豊かにする。尤もアンデルセンの童話は、子どもだけでなく美しい情景が細部にわたって書き込まれ、人間の心を描いており大人にとっても読んでいて心の安息を覚える作品ばかりである。

このように生誕から200年以上たった現在でも、子どものみならず大人にも愛されているアンデルセン童話の魅力はどこにあるのだろうか？アンデルセンは一体どのような人だったのだろうか？以前より感じていた様々な疑問であり、強い興味を今夏、彼の生誕地であるデンマークのオーデンセを訪問するに当たり考えてみようと思った。

第1章 幼児教育における“童話”や言葉の大切さとアンデルセン童話

第1節 幼稚園教育要領と「言葉や表現の領域」

幼児教育においては、幼児にお話を語って聞かせたり話の中の登場人物になって身体や言葉で表現する保育は、上記に述べたように大変に重要視されている。そのことは幼児教育の指針である「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」においても、

前者は 第2章 **ねらい及び内容** 後者は 第3章 **保育の内容** においてそれぞれ **言葉・表現** という領域で示されている。この“領域”とは

幼児の発達を5つの側面から捉え示したもので、いわば学校教育の教科に当たるものである。幼稚園教育要領には、

各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。

幼稚園教育が何を意図して行われるかを幼児の発達の側面からまとめ、以下の5つの領域を編成している。

このように示されている。また、5つの領域とはそれぞれに次のようなねらいをもっている。

No.	ねらいと領域の名前
1	健康な心と体を育て、自ら健康で安心な生活をつくり出す力を養う「健康」の領域
2	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う「人間関係」の領域
3	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う「環境」の領域
4	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う「言葉」の領域
5	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする「表現」の領域

以上のように、幼児教育では「幼児の主体的な活動を通して、身体や言葉で表現すること、また友だち関係を築いていくこと」が重要視されている。

このことは平成18年に約60年ぶりに改正された「教育基本法」の「第2章 教育の実施に関する基本」における（幼児期の教育）の項において

「第11条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。」と初めて明文化され、幼児期の教育の大切さが謳われている。

とりわけ幼児の主体的な活動の中でも、お話の登場人物になって科白を言ったり、お姫様や王子様になって踊ったり歌ったり表現して遊ぶことは、幼稚園や保育所の生活では幼児の好きな遊びの一つである。お話の世界を構築し歌ったりリズムに乗って身体を動かしたり、登場人物になって科白を言ったり、裏方になって道具を動かしたり…、このような「劇あそび」は幼稚園生活における最高の遊びであると確信している。前述したように“自分のクラスオリジナル”のお話の世界を遊びながら具現化し幼児の心を太らせていくのである。また、幼児だけでなく大人も楽しめるアンデルセン童話とは、一体どこに魅力があるのだろうか、ぜひ探求してみたい。

第2節 幼児教育とアンデルセン童話

1835年アンデルセンが30歳の時、初めて「お話」の第1集が出版された。当初は「子どものためのお話」という表題が付けられたが、実際には子どもばかりでなく大人も彼の話喜んで聞いたため後にはこの表題をとっている。事実、アンデルセンは物語を語ることに優れ、お話を語って人を楽しませる才能があった、という数々のエピソードがある。いわば現代での“優れたストーリーテラー”といったところであろうか？例えば彼は

- ・上流社会の人々のディナーの招待客として魅力を振りまき、19世紀ヨーロッパに数多く存在

した小国の君主たちも彼との交流を望み、彼の語る話に耳を傾けた

- ・自作を語ると会場に集まったあふれかえるほどの労働者たちも、宮廷の人々ももちろん子どもたちも、彼の語りに聞き入った

などの伝説めいたエピソードが残されている。このようにこれほど人を惹きつけるアンデルセンの語りを今も幼児は最も身近で信頼のおける保護者や保育者により、絵本という媒体を通し、あるいは信頼のおける者の語りをとおして楽しみ、その中から様々な物事を学んでいる。アンデルセンは今も生き続けているのである。

彼は数多くの作品を残しているが、以下に主だったものを挙げてみる。

- ・みにくいアヒルの子 ・親指姫 ・マッチ売りの少女 ・人魚姫
- ・野の白鳥 ・雪の女王 ・赤い靴 ・お姫様とエンドウ豆

また、彼の作品の中には昔話の再話が9編ある。

- ・火打箱 ・エンドウ豆の上に寝たお姫様 ・旅の道ずれ
- ・小クラウスと大クラウス ・豚飼い王子 ・まぬけのハンス
- ・おとっつぁんのすることは、いつもいい ・パラダイスの園 ・野の白鳥

再話の中では『野の白鳥』が劇あそびによく取り上げられる。主人公のエルザと9人の兄たちを中心に展開するメルヘンに富んだ美しい物語である。これらの作品は、挿絵のついた絵本だけでなく、物語として語り子どもたちに聞かせているものでもある。

その特徴としてどの話にも底流に流れているものとして、主人公は

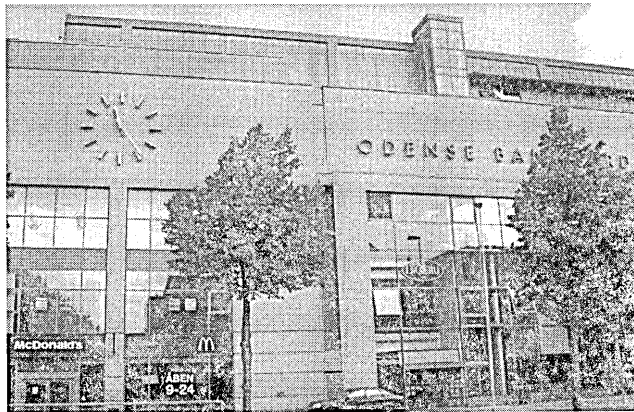
- ・貧しく ・みにくく ・権力を持たず ・虐げられている

などの負の要素をもったものばかりである。しかし美しい心の持ち主であり、豊かさなど望まず真っ正直に生きている。しかも篤い信仰心の持ち主である。このようにどの話もアンデルセンの純粹さを感じさせ、心の純粹さを感じさせるものである。また、作品の背景として街の風景とともにそこに生きている人々の息づかいまでも感じさせ読者は200年前の世界に浸ることができる。そして話の展開が明確であるので、読者は登場人物の性格や風貌などを想像豊かに描くことができる。

第II章 ハンス・クリスチャン・アンデルセンの生い立ちについて

第一節 生い立ち — その① —

1805年4月2日にデンマークの首都であるコペンハーゲンから約140km離れたフューン島に位置するデンマーク第三の都市、オーデンセという小さな町に生まれた。(2012年現在約人口19万人)



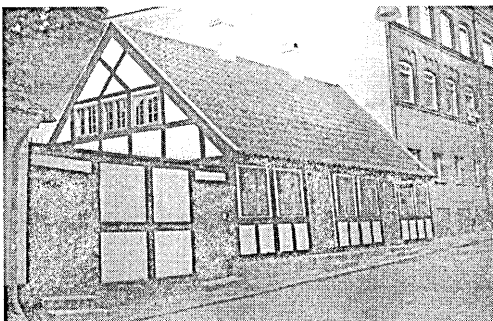
現在のオーデンセの駅、当時と異なりすっかり近代化されている

私の生まれた国デンマークには、昔話や古い歌や歴史が豊かに伝わっています。それには、スウェーデンやノルウェーのものと似通っているものがたくさんあります。デンマークの島々には見事なブナの林と、麦畑と、ウマゴヤシの原っぱがあって、大きな庭のように見えます。そういう緑の島の一つにフーン島という島があります。私の生まれた町、オーデンセは、その島にあります。

～ 中 略 ～

オーデンセには、その頃まだ蒸気船もなく、郵便馬車の連絡もたまにあるだけで、今とは全く違った町でした。

アンデルセンが語っているように200年前でもすっかり変わってしまった、ということであるが、2012年現では当時の面影を残そうとするオーデンセの人々の努力は感じられる。駅から町の中心に向かうとアンデルセンの生家が、自叙伝に書いているようにほぼ正確に再現され一般に公開されている。



オーデンセ中心部から少し離れたところにある
アンデルセンの生家
2歳から14歳までをこの家で過ごす

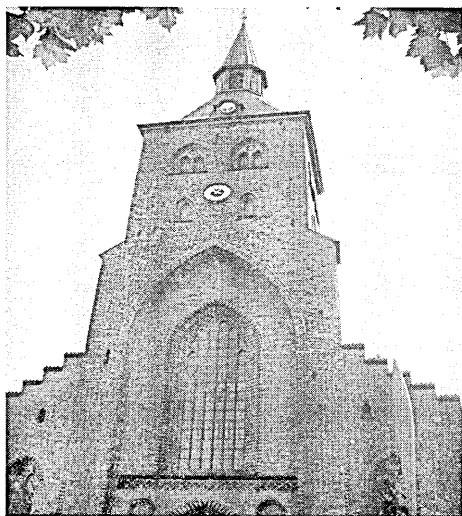


靴職人であった父親の仕事場が再現されている

父は私のベッドのそばに腰掛けて、デンマークの喜劇役者ホルベアの本を大声で読んでいたそうです。私があんまり泣いたからです。

それで父は「お前は眠るかい？それともおとなしく聞かない？」と冗談に言ったそうです。

アンデルセンは22歳の父親、数歳年上の母親をもち生を受けた。父親は貧しい靴職人であったが、文学を愛し、「父は私のために生きていたようなもの……」とアンデルセンに述懐させるほど彼を溺愛し玩具をつくって遊んだり『千夜一夜物語』を読んで聞かせたりするなど幼児期の彼に大きな影響を与えた。また、アンデルセンは生まれた時、虚弱であったため自宅で洗礼を受け、生後10日目で自宅近くにある聖ハンス教会での集会に連れて行かれ時には、あまりに大声で泣いたため牧師を怒らせたということである。しかしその時、名付け親の一人が「子どもの泣き声が大きいかほど歌がうまくなる」と母親を慰めた、というエピソードがある。乳児期から彼は虚弱な体質でありコンプレックス感じていたというである。

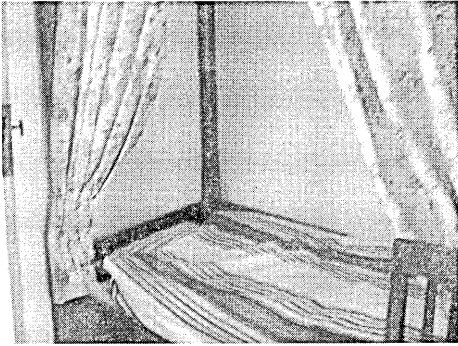


聖ハンス教会

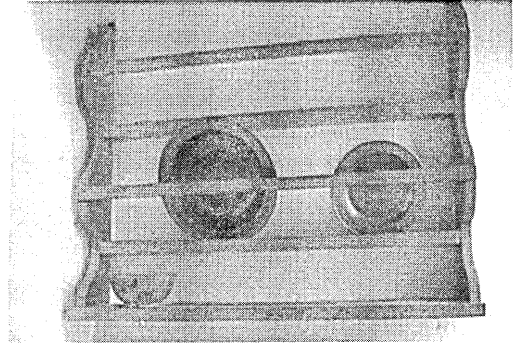
赤ん坊のアンデルセンは虚弱だったため、自宅で洗礼を受けたが生後10日聖ハンス教会に連れて行かれた時、あまりに大きな声で泣いたため短気な牧師を怒らせてしまう。その時、名付け親のゴマルさんはアンデルセンの母親を慰め「赤ん坊は大きな声で泣くほど、大きくなったら、いい声で歌うようになりますよ。」と言った。

また、父親は自分が満足な教育を受けていないことを悔やんでいたが、読書家で思慮深く、政治や宗教に反発するという、当時としてはかなり進んだ思想の持ち主であった。他の点でも独自の思想をもち、人間以外の動物や物でさえ一例えば葉っぱ、花やカブト虫—それぞれ命があり個性があるとアンデルセンに教えたという記録が残っている。そして小さな人形芝居の道具を作って演じては息子を楽ませた。母親は世間知らずではあったが大変思いやりの心にあふれた女性だったとアンデルセンは自伝で述懐している。

このように貧しく学問のなかった父親であるが、息子にはいつも話を語って聞かせたということである。アンデルセンは自分自身でも言っているように「自分の身の上話を語ることが大好きだった」と言っているように父親の強い影響を受けていることが分かる。



ベッド



食器類

たった一つの小さい部屋は、靴屋の道具とベッドと赤ん坊の寝床で、もう一杯でしたが、幼いころの私の住まいは、その部屋だったのです。

しかし壁には絵がたくさんかかっており、仕事場の上の棚には、お話の本や歌の本が並んでいました。小さい台所は、ピカピカ光るお鍋やお皿でいっぱいでした。台所から梯子を上ると屋根裏部屋に上がれました。隣の家の方に続いている櫃の中に、土をもった大きな箱が置いてありました。母の庭と言えばそれだけでした。この庭は『雪の女王』という私の童話の中で、花を咲かせ続けています。

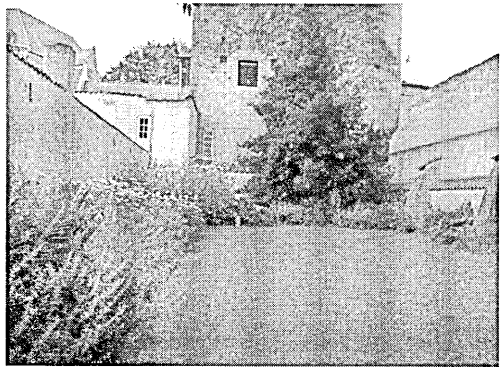
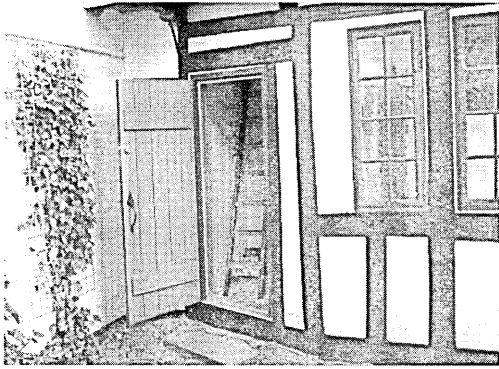
屋根裏部屋の母親の庭に咲いた花が『雪の女王』の童話に登場するように、アンデルセンの作品には自身の体験談や身近な出来事から発した創作の物語が多い。このことは、同時代のグリム童話が民族説話から影響を受け創作したこととの大きな違いがある。

※1812年アンデルセンが7歳の時、グリム兄弟が『家庭と子どものための童話集(第1巻)』を発刊する。彼らはドイツのカッセルに長く住み、ゲッティンゲンの大学で教鞭を執っていた。

(2) 生い立ち — その② —

1816年、靴職人だった父が戦争から復員後、病を患いアンデルセンが11歳の時、33歳で亡くなる。彼の家庭はますます困窮を極め、母親は時々洗濯婦としてオーデンセ城で働き彼を養育した。母親が城に行く時には、彼も一緒に行き他の使用人の子どもたちや、後にフレデリック7世国王となるフリッツ王子とも一緒に遊んだ。生家にも小さな裏庭があり、彼は幼児期から大変遊び好きな子どもであったことが窺える。

このように父親を亡くし寂しい暮らしの中であったが、アンデルセンは、父親から教わった人形芝居の道具を使ったり話を創作したり登場人物になって演じたり、彼は貧困に負けず明るくたくましく生きていた。自分の作った人形芝居のセットで遊んでいれば、いつも時間が足りないほど熱中し、本好きの大人や紙芝居の人たちと親しくし、彼の周りにはアンデルセンの才能を見出す人々もいた。



生家の裏庭

近所に、亡くなった牧師さんのおくさんでブンケフロードという人が死んだご主人の妹さんと一緒に住んでいました。その方が私を家に入れてくれました。学問のある人の家に親切に入れてもらったのは、それが初めてでした。～中略～死んだ牧師さんは詩を作っており、その頃、デンマークで名を知られた文学者でした。この人の作った『糸紡ぎの歌』はその頃よく歌われていました。～中略～ここで初めて、私は詩人という名が何か尊いものを表すように、尊敬の気持ちで口にされるのを聞きました。

赤ん坊の時からアンデルセンの父親は、ホルベアの喜劇を読んで聞かせたが、このブンケフロード家で彼は、初めて詩のすばらしさに気付き、シェークスピアの作品を読んで感動し、初めての作品『アポーとエルビーラ』を著す。

同時期に、慈善学校に通学するようになるが、友だちに夢のような話ばかりを話すことで嫌われ、学校はあまり好きではなかった。そして厳格な牧師や友だちにいじめられている、と少しでも感じると、すぐに帰宅し二度とその学校には戻らなかった。ただ一つ馴染んだ学校は小さなユダヤ人学校で生徒を思いやる温かい雰囲気であったが、アンデルセンが入学してから1年も経たないうちに、残念ながら閉校してしまった。その後、織物工場やタバコ工場で働くがどこも長続きしない。

どうも彼は独特の容貌からなのか、あるいは人形遊びが好きという内向的な性格のためなのか、友だちからは「いじめ」の対象とされていたようである。

そこで1819年、14歳で舞台俳優になることを決意し、首都であるコペンハーゲンに出る。それからというもの舞台俳優を夢見、歌やバレエの勉強をする生活が始まった。

(3) 生い立ち — その③ —

最初の父が死んでから、私は全く一人ぼっちにされました。母は他所の家に洗濯の手伝いに行きました。私は家で一人ぼっち、小さい人形で芝居をしたり、人形の着物を縫ったり、芝居の本を読んだりしました。～中略～ その家で私は初めてシェクスピアを読みました。～中略～ 大胆な場面や血なまぐさい事件や、魔女や幽霊などは私の趣味にぴったりでした。～中略～ 早速私は自分の人形芝居でシェイクスピアの芝居をやって、ハムレットの幽霊をみたり、リア王と荒野原で暮らしたりしました。～中略～

ちょうどその頃私は最初の芝居を書きました。『アボールとエルビラ』という題名がつけられました。～中略～ 今度の父は若い静かな人でした。私の教育には全く口を出そうとしませんでした。それで私は、のぞきメガネと人形芝居にばかり気をとられて過ごしました。色とりどりのボロ切れを集めて、自分で切ったり縫ったりするのが何よりの楽しみでした。

コペンハーゲンでの歌やバレエの勉強をしていた最初の3年間は、困窮を極めオペラ歌手になることには失敗し、それでも演劇の道を諦めず劇場に通いつめてはひたすら戯曲を書く毎日を送っていた。しかしこの時、彼に目をかけてくれる大物政治家、ヨナス・コリンが現れた。コリンは希望を捨てずに一人で生きている貧しい少年をなんとかしてやろうとお金を用立てくれ、自分の5人の子どもと分け隔てなく面倒を見てくれた。学校教育を受けていない17歳のアンデルセンをコペンハーゲンから100^キ離れた学校にも入れてくれたが、その学校でのクラスは11歳のクラス、しかも校長は意地悪で彼からすべての自由を奪い、詩を書く事も禁じたということである。この頃がアンデルセンにとって一番辛い時期であった。それでもなんとか学業を続け試験をこなして「物を書く」という好きなことに没頭した。

以後、アンデルセンは、大人向けの詩や戯曲、旅行記を書く名の知れた作家になり、1835年の元旦、自分流の語り口で童話を書いた。同年5月、4つの物語を収めた紙表紙の薄い本が彼の完全なオリジナル作品の第一声として発売された。この作品については、彼が「下層階級の生まれ」であることを理由に酷評する批評家もいたが、アンデルセンの豊かな才能と独創性のある物語は彼を一躍有名にした。

貧しい田舎町で育った少年が成功を収めていったが、実際には様々な試練があった。それは「下層階級の生まれ」であることへの人々の冷たい反応と容貌の醜さにあったと言われている。背が高く、いかつい顔立ちはかなり人目を引いたということである。彼は子どもの頃から「自分はひどく醜い」と言っていたが、前述したようにアンデルセンはお話を語って人を楽しませる才能があり、19世紀ヨーロッパに数多く存在した小国の君主たちも彼との交流を望み、彼の語る話に耳を傾けたということである。彼が話を語ると会場に集まった観客はその語り口調に

夢中になった。しかしこうした自信あふれるような姿ばかりでなく、彼は自己不信にも苦しんでいた。例えば「みにくいアヒルの子」など自分の姿と重ねていたのかもしれない。

アンデルセン自身が話の中に自分を投影させていたのではないだろうか？

1835年、30歳の時に出版した『即興詩人』が大評判となり作家としての地位を確立する。以後多くの童話ばかりでなく優れた紀行文をも残している。

実際に彼は1829年に、『ホルメン運河からアマゲル島東端までの徒歩旅行—1828と1829における』を自費出版する。これは好評でドイツ語訳も出るほどであった。彼が童話作家としてだけでなく紀行文学者としての評価も高い故である。

第三章 アンデルセンの作品の中から

ここでは具体的に彼の作品をみていきたい。幼稚園教師としてアンデルセンの童話は色々読んだつもりであったがまだまだ知らなかった作品があり、その読み方は単に筋を追っていただけだったかもしれない。再読してみることにする。

第1節 青銅のイノシシ『アンデルセン童話集(二)』

実際にフィレンツェの町に行ってみるとアンデルセンの歩いた道やきっと見たに違いない風景もまるで200年前、そのままに迫ってくる。

この作品は、鑄造された猪であるのにあたかも生きているように、動き出すように読み手に伝わる様は、アンデルセンの想像性の豊かさはもちろんのこと話の骨格が確かで知らず知らずのうちに彼の世界に連れて行ってくれる。また背景となっているフィレンツェの町の地図が、当時と変わりなく忠実に再現されており驚かされる。題名である「青銅のイノシシ」は鑄造したもので、原型は古代ローマ時代の作品であり大理石でできている。実際にウッフイツィ MUSEUM の廊下の突き当りにある。以下に特にイノシシに魂が入っていると思われる箇所を抜粋してみる。

イタリアのフィレンツェの町のグランツドゥーカ広場からあまり遠くないところに、たしかボルタ・ロッサと呼ばれている小さな通りがあります。この通りの、青物を売っている一種の市場の前に、たいそう見事なつくりの青銅のイノシシがあって、爽やかに澄んだ水が、そのイノシシの口からさらさらと流れ出ています。イノシシは年のせいで、すっかり黒ずんだ緑色になっていますが、ただ、鼻の先だけはまるで磨いたようにピカピカ光っています。～中略～いまも何千というバラの花の咲いている大公家の宮殿の庭にぼろを着た一人の小さい少年が、一本の笠松の下に一日中座っていました。～中略～
少年の耳に、イノシシがはっきりと、こういうのが聞こえました。「ねエ。坊ちゃん！しっかりつかまっていますよ！走り出しますからね。」

～ 中 略 ～

真夜中になりました。と急に、青銅のイノシシが身動きしました。そして、少年の耳にイノシシがはっきりと、こういうのが聞こえました。「ねェ、坊ちゃん！
しっかりつかまっていますよ！走り出しますからね。」

～ 中 略 ～

「親切なイノシシさんありがとう！君に仕合わせがありますように。」こう少年は言って、青銅のイノシシを軽くたたいてやりました。イノシシは少年を乗せたまま、パタン、パタンと階段をおりていきました。

この作品を通しアンデルセン童話の素晴らしさを物語るものとして、現在の Firenze の地図を参照してみるとそのまま町や通りを辿ることができる。

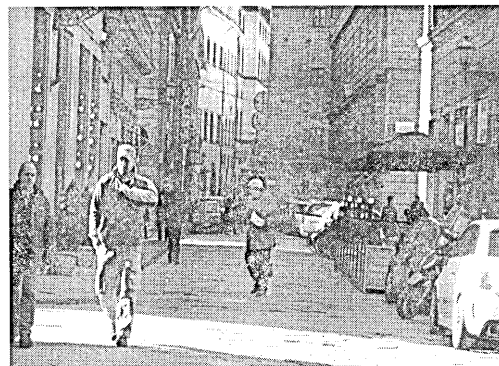
このことは、彼の想像力の豊かさを実証し、地名をも偽らない誠実さであると感じる。そしてこの作品の根底には貧しいものへの思いやりが溢れていることが分かる。一方、日本では全国、どこの街を探しても約200年前の町名がそのまま残り、道路もそのまま、と言った都市など



新市場のロジアのイノシシ《右のイノシシのコピー》



ウッフィツィ美術館にあるローマ時代のイノシシ



グランツドゥーカ広場・ポルタ・ロッサ



ないのではないか。イタリアを始めとしてヨーロッパの国々が如何に自分たちの文化や伝統を大切に守っているのかが、アンデルセンの童話からも窺える。通日も建築物も何度も何度も修理されて大切に保存されていることは驚きである。

第2節 マッチ売りの少女『アンデルセン童話集(二)』

誰もが知っている代表的な作品である。1843年に出版され評判になったものである。アンデルセンは『童話と物語集』解説(1863年発刊)のなかで、この作品は、外国旅行の途次、数日間滞在したグロースデーンの城で、たまたま知人のフリンク氏から手紙で、彼の年鑑作成のために、同封されていた3枚の印刷された絵の中からのどれか一つについて童話を書くようにと頼まれて書いたものであると、述懐している。また、この話の主人公の貧しい少女は彼の母親がモデルだと伝えられている。彼女も貧しい階層の出身で、学校にも行かせてもらえず寒い街を物乞いに出され、お金を稼がなければ家に帰れなかったという話を聞き、この物語を創作したのではないか。また、この話に出てくるおばあさんもアンデルセンの大好きだった祖母がモデルになっていると伝えられている。

それは、たいへん寒い日でした。雪が降っていました。そして、あたりは、もう暗くなり始めました。それはまた、一年の一番お終いの夜、つまり大晦日の晩でした。この寒い、そして、暗い中を、一人のみすぼらしい身なりの年のいかない少女が一人、帽子もかぶらず、おまけに裸足で通りを歩いていた。

～ 中 略 ～

たくさんのクリスマスのろうそくは、高く、どこまでも高く、空へ登ってゆきました。少女の眼には、それらが明るい星になって見えました。そのうちの一つがとんで、空に長い光の線を引きました。

「あっ。誰かが死ぬんだわ！」と少女は言いました。もうとっくに死んでいますが、この世の中でたった一人自分を可愛がってくれた、年取ったおばあさんが、「星が一つ落ちると、そのたびに、ひとつの魂が神様の所へ登ってゆくんだよ」と言っていたからです。～ 中 略 ～

「おばあさん！」と少女は叫びました。……二人は神様の身許に、召されたのです……。 「この子は、温まろうとしたのだね」と人々は言いました。誰も、この少女が、どのような美しいものを見たか、どのように光に包まれて、おばあさんと一緒に新しい年の喜びをお祝いしに行ったか、それを知っている人はいませんでした。

アンデルセンの時代と違い、現在の豊かな社会に生きる幼児にとって、「貧しさ」は実感として想像できにくいことかもしれないが、この美しい物語は大好きなものである。そして幼児期にぜひ出合わせたい物語である。特に下線部は、アンデルセンの情景描写の優れた部分と考え

る。人物描写が丁寧で挿絵がなくても、おそらくデンマークの寒い街を裸足でマッチを売りに歩く貧しい少女の姿を読み手に想像させる。

アンデルセンの作品の根底にあるのは「貧しさ」である。彼自身も10代の頃、寒さと飢えを経験している。演劇を学びながらコペンハーゲンの街をさまよって歩き原稿を売り込んだり劇場で仕事を探したりした。前述の通り母親も貧しい階層の出身で学校も行かせてもらえず寒い街を物乞いに出され、お金を稼がなければ家に帰れなかったという話を聞き、この物語を創作している。また、この話に出てくるおばあさんも如かりである。アンデルセンの大好きだった家族は皆、貧しかったことが分かる。

しかし彼がこの話を書いた1848年頃は既に有名になっており、上流階級の人々が宿泊するグラステン城滞在中に書いたものである。ところが彼はこの物語りを書きながら、自分が身を置く富裕な世界に恥ずかしさを感じており、心底豊かな人々の仲間になることはできなかった。

日本人は誰でも知っているマッチ売りの少女であるが、子どもの時に読んでもらって記憶では“寒い寒い大晦日のよる ‘マッチはいりませんか？ マッチはいりませんか？’ と酔客を相手にマッチをうる貧しい少女がいた。一本もマッチは売れず、かわいそうにとうとうその少女は死んでしまう。”程度の読み方しかしていなかったがこうして読み返すと、なかなか美しい物語である。背景にあるものはアンデルセンの深い信仰心と慈悲の心である。情景としてはデンマークのとある町の石畳の一本の通り、時々馬車が通る。家々の窓からは温かな光がこぼれる。そこに亡くなった母親の大きな木靴を履いた少女が一人……。

ここでもアンデルセンは大好きだったおばあさんを登場させている。

第3節 親指姫『アンデルセン童話集（一）』

幼稚園では劇あそびに必ずと言っていいほど取り上げられる話である。1835年に出版されている。四季の変化とともに親指姫の波乱に富んだ一生が美しく描かれ、何度読んでも飽きない詩情あふれる物語である。アンデルセンの作品には小さな生き物や妖精、天使、魔法使いがよく登場している。現実の世界では起こりえないことやありえないことを好んで描くとともに死後の世界をも想像させる。

むかし昔、あるところに一人の女の人が住んでいました。その人は可愛らしい赤ちゃんがひとり欲しいと心から願っていました。けれども、どこからもらってきたらいいのか、わかりませんでした。 ～ 中略 ～ 親指姫が可愛い寝床の中で寝ていますと、一匹のヒキガエルが、窓からピョンと飛び込んできました。

～ 中略 ～

林の中で遊んでいた小鳥たちは、親指姫を見ると「なんて綺麗な可愛い娘さん！」と唄いました。 ～ 中略 ～ さて、親指姫のいた森のすぐ外には、大

きな麦畑が広がっていました。でも、麦はとっくに刈り取られて、裸のかさかさな切り株だけが、凍りついた地面につっ立っていました。

～ 中 略 ～ この王子は、あのヒキガエルの息子や黒いビロードの毛皮を着たモグラと比べたら、似ても似つかぬ、立派な方でした。



※この挿絵は、アンデルセンが一番気に入っていたとされる海軍士官V. ペーダーセンのものである。

かなり長編の、四百字詰め原稿用紙にして三十枚以上にもなる物語であるがすみずみまできめ細かく描かれている。(残念ながらほとんどの絵本やビデオは極端にダイジェストしているか、全く別の作品であるようなものもある。)

下線部は特に情景を彷彿とさせるところである。

子どもの頃から一人ぼっちで人形の服を作ったり、人形芝居をすることが大好きだったアンデルセンは、小さなおとぎの国の物語を描くのは得意であった。細かく描かれている箇所をみれば親指姫の眠る“きれいにニスを塗ったクルミの殻の揺り籠”“テーブルの上には水をいれたお皿が1枚、チューリップの花びらがお船です。”“青いスミレの花びらが、敷布団で、バラの花びらが掛け布団”そして畏敬の念を抱かせるツバメの生き返る瞬間などアンデルセンの話の雰囲気伝わってきて、幼児は情景を描きながら聞き入る。読者には自由に想像させながらも、その想像を支え、創り出す細部のイメージを彼は丁寧に書き込んでいる。だから幼児にもこの話を十分に味わうことができるのではないか。そして親指姫は最後には花の国の王子と結婚して幸せになるというハッピーエンドの結末が読み手の気持ちまでもを幸せにする。

おわりに

アンデルセンの作品を再び読んでみて、改めて子どもだけでなく大人も十分に楽しめる美しい物語の多いことを実感した。

何故なのか？アンデルセンは、あくまで読者の自由な想像にゆだねながらその想像を支え創り出す細部のイメージを丁寧に描いていることにある、と感じた。情景描写しかり、人物描写しかり……、読者は聞き手は知らず知らずのうちにアンデルセンの世界に引きこまれていく。

また、物語の骨格が明確であり話の展開がリズムカルで聞き手に期待させるものがある。子

どもたちはワクワクして聞く。彼の文学は話の骨組みがしっかりしていて細部にわたって生き生きと想像豊かに目に見えるように書き込んでいる、ということに尽きるような気がする。

また、アンデルセンは次のようにも述べている。

「本来、文体というものは、その場で語り手の語り口を耳で聞いているようではなければならない。言葉はそれゆえ口頭で話しかけるような調子に近づかなければいけない。子どもたちのために話すものだが、大人も耳を傾けるに値するものでなければいけない。『火打箱』『小クラウスと大クラウス』『エンドウ豆の上に寝たお姫様』の三篇は私が子どもの時に、紡ぎ部屋や、ホップ摘みの際に聞かされたものである。『小さいイーダの花』は、それに反して、私がある日詩人ティーレの家で、彼の幼い娘のイーダの植物園の花のお話をして聞かせた際にできたもので、その時この子に言った言葉や仕草が頭に残っていたものを、後にこの童話を書いたとき、その中に再現したものである。」 全く同感である。

そして忘れてならないのはアンデルセンは学校教育こそ十分には受けていないが、旅行を自分の学校として優れた紀行文学者でもあったことである。

彼は旅をしながら多くの作家や学者と交流し数多くのことを学んだのだろう。

アメリカの高名なストーリーテラーのルース・ソーヤー (Ruth Sawyer 1880~1970) は次のように言っている。

「自分を豊かにするには、いろんな経験を試みる必要があります。それには旅行が大変いいことは言うまでもありません。旅行は、人の視野をひろくさせ、いろんな土地や人間に対する理解力を深めさせてくれるからです。本を読むことも勿論必要ですが、本を読んで理解したことを、旅行その他体験によって身をもって感じるにより、その理解は本物となります。」

全くそうではないか。アンデルセンはデンマークに安住することなく心身ともに孤独な生涯を送った。

実際アンデルセンの作品には、周囲の情景が丁寧に表現され、読み手をまるでそこにいるかのような気持ちにさせてくれる。このことはアンデルセンが自分も滞在した街や山々、川、海などを背景に話を創作したと思われる。

物語の世界があるから幼児にとって「親指姫になって……」「白鳥になって……」表現することが楽しいし心からそのものになれる。

また、彼の作品の中には、主人公が死んでしまう結末の話も多い。しかもその死は悲惨や残酷さを感じさせるものではなく透明である。それはアンデルセン自身が死に体する恐怖を感じていなかったことによるものではないだろうか？また、死を神のもとに行くこと、と捉える信仰に支えられた強い気持ちがあったのではないだろうか？アンデルセンは、貧困に対する絶望感をいつも感じており、それに対しての無関心な社会への嘆きを童話を媒体に訴えていたのではないだろうか。人間の心を真正面から描いているので4、5歳の幼児にとってもアンデルセン

